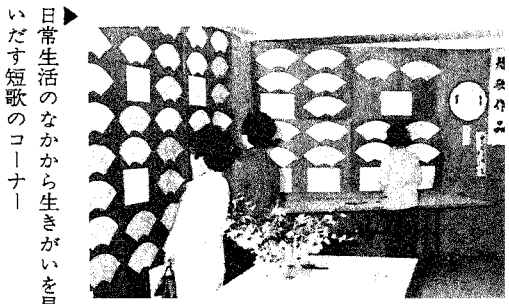


今年も恒例の文化祭が文化会館を主会場に11月1日～4日までの4日間開催されました。台風被害の復旧作業、農作業等に大わらわな人々のため、出足が憂慮されましたが、澄みきった青空のもとでの菊花の鑑賞、あるいは短歌の吟味にと連日にぎわいをみせました。とくに今年は、国際児童年とあって子供を扱った作品が多くみられ、家族づれで深まりゆく芸術の秋を満喫する風景が随所にみうけられました。

文化祭フォトスポット



大平地区の吟士による「山中問答」は、やはり雰囲気があります。『吟天地』



日常生活のなかから生きがいを見いだす短歌のコナー



地面まで這いそうな香気漂う懸漣



手づくり民芸は身近かな不用品を利用して



都留ロータリークラブが韓国との文化交流で開催した韓国小学生の絵画展



近世 (13)

さらに元忠の遺物としては静岡県久能山の宝物殿に、鳥居元忠の手形がのこされている。

元忠が上総国矢作へうつされてからは甲斐国は豊臣領となり、天正十八年に羽柴秀勝の家臣の三輪五右衛門正家が治め、ついで加藤光泰の領知するところとなり加藤作内が来て、谷村に居城したが同年美濃国にうつされた。

文禄二年に浅野長政が甲斐国に封をうけて、その一族である浅野左衛門氏重が郡内を領有するようになり勝山城を築いたと伝えられ石垣、から堀の遺構のみが残されて現在調査中である。この時に谷村を城下町として大手をかぎり上谷村、下谷村にわけ、鎮門(ちんもん)南大門をかまえて近世城下町のもとをつくった。そして国中と同じように「太閤検地」がおこなわれたが、資料らしいものは何もない。

浅野氏が紀州木の本へうつされると、彦右衛門元忠の二男の久五郎成次が、関が原合戦の功によって慶長六年九月に父の旧領であつ

た郡内領をつぎ谷村城主となった。父におとらぬ武将であったように伝えられ、関が原の勝利のあと、家康から父の仇(あだ)となった石田三成を預かるようにいわれ、そのうらみを晴させようとしたが成次は彼を厚くあつたかい、衣料などあたえたので三成はそのおもいやりに感じて涙をながしたというエピソードも語り伝えられてきた。その後は成次は七千石の加増をうけ、同年に土佐守に任官した。一六一五(元和一)年に大阪の役(夏の陣)に出陣して功をみとめられたという。

同二年には二代將軍秀忠の命をうけて駿河大納言忠長(秀忠三男三代將軍家光の弟)の老臣となり甲府城下でもあつた。

九州肥前国日野江城主であつた有馬晴信は、教名を「ドンヨハネ」また「ジオアン・プロタジオ」と称し、熱心なキリシタンであり、一五八〇(天正八)年にはすでに城内の仏寺を改造してセミナリオ(神学校)をつくった四万石大名であつた。一五八二(天正一〇)年には大友義鎮(よししげ)大村純友とともに少年使節をローマに派遣したほどであつた。かのセミナリオで教育をうけた少年たちは、ヨーロッパの文化をみてどんなに感激し、また学んだことであらう。

(羽田富士男)